



Title	＜書評＞Mauricio A. Font, Coffee and Transformation in São Paulo, Brazil / Elizabeth McCahill, Reviving the Eternal City: Rome and the Papal Court, 1420-1447
Author(s)	野口, 駿之介; 谷, 香里奈
Citation	パブリック・ヒストリー. 2021, 18, p. 48-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79229
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Mauricio A. Font
Coffee and Transformation in São Paulo, Brazil

Lexington Books, 2010, ISBN 978-0-7391-4750-4

本書の著者である Mauricio A. Font は、ニューヨーク市立大学の社会学教授であり、彼の研究は、ブラジル、キューバを中心にラテンアメリカにおける開発と改革と、西半球における国際協力に注目している。また、彼は本書をはじめとするブラジルに関する著作だけでなく、キューバに関する著作も数多く執筆している。本書は 1890 年から 1930 年の間に経済成長するブラジルのなかでも、経済の基盤が農業から工業へと最も発展したサンパウロ州の社会的、政治的、経済的な力の相互作用を理解する点で有益であると思われる。

本書の構成は、以下の通りである。

1 章 Introduction

第 1 部 Export Sector Organization,
Contention, and Structural Change

2 章 Planters and Independent Agriculture

3 章 Elite Mobilization and Policy-Making

4 章 Coffee and Industrialization

第 2 部 Politics: The Quest for Hegemony

5 章 A Changing Policy

6 章 From Export Sector Segmentation to
Power Struggle

7 章 Coffee and the Revolution of 1930

8 章 From Contention to Revolution

9 章 Demise of an Old Regime

10 章 Conclusion: A Great Transformation
in São Paulo

文献一覧、付録

第 1 部は、3 つの章で構成されており、コー

ヒー経済の社会組織と工業化や社会変革のプロセスとの関係に焦点を当て、サンパウロ州がどのようにしてコーヒー経済を発展させてきたのかを考察する。第 2 部は、6 つの章で構成され、経済的利害が政治的対立にどのように反映されていたか分析する。また、コーヒー経済の受益者が、州・国家の政治支配力を持つサンパウロ共和党 (Partido Republicano Paulista、以下 PRP) に反対する運動に直接関与していたという仮説から、コーヒープランターと PRP の関係に焦点を当てる。また、著者は本書を通して、サンパウロ州の主要な *Correio Paulistano*, *Diario Nacional*, *O Estado de São Paulo* の 3 つの新聞を史料として用いている。以下では、本書が対象とする時代を概観し、先行研究を確認する。

ブラジル史において、1889 年から 1930 年までのブラジル最初の共和政は、「第一共和政」と呼ばれる。この時期のブラジル社会は産業化、都市化、移民労働力による繁栄という急激な変化を経験する。コーヒーはブラジル経済の推進力となり、これらの発展を支えた。コーヒー経済の発展は、工業化を刺激した。ブラジルの工業化は、第一次世界大戦以降に加速し、1930 年までに、軽工業でかなりの輸入代替がおこなわれた。しかし、奴隷制の廃止とともに、賃金労働に依拠するコーヒー経済の発展の結果、国内市場が形成される一方で、経済の対外依存性はむしろ高まった。このことは、貿易収支は黒字になり、国際収支は好転したが、大量の外資流入と政府借款の増大のために対外債務が累増した点に示される。

19 世紀後半の世界経済の大拡張が近代ブラジルの経済的発展の基盤となったことは、いくつかの研究で指摘されている⁽¹⁾。広

大な土地が、コーヒー、穀物、砂糖、その他の主要な輸出商品によってダイナミックな経済のフロンティアとなったからである。その過程で、市場経済の確立、移民の流入、文化の変容、経済発展、都市化、制度的・政治的な近代化といった大規模な構造変化の基礎が築かれたこともよく指摘されることである。本書は、1889 年から 1930 年までの「第一共和政期」における PRP に焦点を当て、同党内の派閥や亀裂の分析から 1920 年までに PRP が一枚岩でなくなっていたことを明らかにする。

以下では、細部にわたる要約は避けて、パート毎に内容紹介をしていく。

第 1 部では、伝統的な大農園主に対抗する中小生産者の生成過程とサンパウロの社会組織の細分化の過程を明らかにしたうえで、サンパウロにおける工業化の始まりと農耕社会の分化の過程を結びつけて考察し、独立した中小生産者の農業を基盤とした代替経済の役割について論じている。

サンパウロ州西部のコーヒー生産地域では、19 世紀に奴隷制度を基盤としたコーヒー経済が開花した。1880 年代から 1930 年代にかけての世界的なコーヒー需要の高まりにより、ブラジル産コーヒーの輸出が爆発的に拡大したことで、この地域は飛躍的な成長を遂げた。著者は、従来の研究が、コーヒー産業が経済的・政治的に優位に立っていることを強調しすぎているとして、その他の農業組織の役割については、十分に検討されていないと主張する。この時期のサンパウロ州の特徴は大量の移民の流入であり、それは農業経営者たちにとって経済的な好機となった。コーヒーの輸出に依存する経済成長から工業化が進む過程で、伝統的な大規模農園と新興の中小生産者や

新興の産業労働者との対立や差別化は、経済成長にだけでなく、政治にも影響した。

この対立の緩衝材として、1924 年にサンパウロ州のコーヒー協会が設立された。コーヒー協会が行った会議では、コーヒーの価格化、移民、課税、コーヒー産業の商業的統制、プランター階級の政治的組織化などが議論された。この会議の分析から著者は、サンパウロ州コーヒー協会の設立を「第一共和政期」におけるコーヒー政治の分水嶺と位置付けている。また、国家の介入がサンパウロの人びと（以下、パウリスタ）をコーヒー産業従事者とその他で分化させ、サンパウロ州内で異なる産業部門での対立が見られるようになったと主張する。新たな産業部門の台頭は、伝統的なコーヒー生産者の政治的・経済的優位性を脅かした。

サンパウロにおける工業化の始まりをコーヒー中心の経済の延長線上とする研究が多いが、著者は工業化をコーヒー中心の経済の対極として捉え、工業化の機会が拡大したのは、大規模農園とは異なる生産形態に根ざした代替的な農業経済が拡大したためであり、大農園の成功ではなく、むしろその欠点が工業化の拡大につながったと主張する。

第 2 部では、ブラジル「第一共和政期」のサンパウロの政治システムとその分裂について考察する。その際に、政治的中央集権、集团的行動、そして急速に変化する社会構造と政治の間の相互作用に注目し、それらが 1930 年の革命にどのように寄与したのか明らかにしている。

移民や新興の産業労働者が、政治参加の機会を創出したことで、「コロネリズム」⁽²⁾として知られる伝統的な顧客主義的なシステムが変容した。「第一共和政」期にはパウ

リストのプランターの覇権が維持されていたという従来のテーゼは、パウリストのエリートの中には構造的に大きな分裂はなく、1930年の政権崩壊まではコーヒー産業のエリートが政治的に支配的であったことを示唆している。しかし、著者は、1930年以前にサンパウロ州で起こった様々な反体制運動が過小評価されていると主張し、新聞史料を用いて、1920年代の地方・州レベルの政治的対立と、政治におけるパウリストエリート間の分裂を明らかにしている。その分裂は1926年の民主党（Partido Democrático、以下PD）の結成に示される。この政党は、「第一共和政」期にサンパウロで唯一組織化された野党である。1930年の革命までに、PDとPRPは対立するようになった。

1930年の革命によって生まれた政治体制は、寡頭政治の終焉、中央集権化と近代化、労働の変化、それまで軽視されていた産業部門の工業化の拡大を促進する政策を採用した。また、このことは、同時にパウリストのコーヒー産業エリートの敗北を示していた。この革命は、コーヒー経済の支配力とサンパウロの政治的優位性を低下させた。ブラジル「第一共和政」の最後の2年間を揺るがした2つの大きな問題は大統領継承と1929年のコーヒー危機であった。著者は、1930年の革命を外的な影響や政治的な対立の点から強調した説明では、ジュリオ・プレステス大統領がなぜ、パウリストや他のブラジル人に受け入れられなかったのかについて説明することはできないと主張する。著者は、大統領の後継者問題や1929-30年の経済危機が表面化する以前から、パウリストのエリートが、権力闘争を通じて、すでに分裂していたことを理由に

挙げ、外的な要因よりもサンパウロ州もしくは、国内の要因を強調している。

本書のねらいは、1920年代における経済の多様化がブラジルの政治・経済制度の近代化に不可欠であったことを示すことである。また、本書の視点は、輸出特化が負の影響をもたらしたとするA・G・フランクの従属論の立場ではなく、植民地的な発展から外向きの発展へ、そして国内市場向けの工業生産を中心とした別の発展へと移行し、本書の対象時期を階級形成過程と位置付けるF・H・カルドーソの立場に基づいている。

本書は、ブラジルの歴史における1889年から1930年までの「第一共和政期」におけるコーヒー産業エリートの政治的優位性を否定するものである。この時代は、コーヒー生産地域であるサンパウロ州のPRPによる一党支配の時代であり、同州が40年間にわたって国の大統領職を決定する上で主導的な役割を担ってきた政治体制の時代であった。このPRP内での派閥や亀裂を詳細に調べ、1920年までにPRPがその一枚岩的な性質を失っていたことを示している。サンパウロ州の経済的な利益の上昇と多様化は、移民、小規模な農園でコーヒーを栽培する生産者、新興アクターである実業家を生み出したエリートたちにまで及んでいた。これらの新しい人々がPRPを支配するようになり、PRPはコーヒーだけでなく、多様な事業利益を擁護するようになった。つまり、経済の複雑化は、同時に複雑な政策ニーズと政治同盟を生み出したのである。

本書はサンパウロ州の支配政党が、どのようにしてコーヒー利権を重視しない大統領を誕生させ、1930年の革命で支配権を失ったのか、また経済の多様化がブラジル政

治の近代化にどのように貢献したかを明らかにした点で優れた研究である。しかし、本書にはいくつかの課題があるように評者には思われる。以下では、その2点を順にみていきたい。

第一に、コーヒープランターたちや新興の産業労働者たちへの外的影響が十分に検討されていない点である。ブラジル経済史の分野で多く成果を残しているF・V・ルナやH・S・クラインによれば、20世紀以降、ブラジルの近代化は、イギリスをはじめとする外国の金融資本の成長に伴い、公共事業、鉱山開発、工業など多様な分野への投資が増加することで達成されていく⁽³⁾。1928年、ブラジルはラテンアメリカ最大の債務国であり、ブラジルの対外債務残高はラテンアメリカ全体の44%にも及んでいた。1923年を例にとれば、対外債務の返済に輸出収入の22%があてられている。1930年革命およびそれ以前の動きを、ブラジル国内のみの影響で検討することには、大きな問題があるように思われる。著者が主張するように、コーヒーエリートがPDの野党を支持していたならば、1930年の選挙において、ジュリオ・プレステスが大統領に当選したことや、前大蔵大臣のヴァルガスが、サンパウロ州知事であるジュリオ・プレステスに約30万票の得票差をつけられていること、1930年革命に参加したパウリスタの消極的な態度は、どのようにして説明できるのだろうか。また、20世紀以降に経済的に重要視される問題は、コーヒーの保護と金融政策であった。例えば、1906年の「タウバテ協定」⁽⁴⁾に代表されるコーヒー価格維持政策は、第一次世界大戦の開始によって中断されるが、1917年サンパウロ州政府が国内の銀行から借り入れを行ったこと

によって再開した。1924年には他のコーヒー生産州も同様の政策を採用している。著者は、各産業部門や階級の細分化に焦点を当てているため、これらの点を軽視しているのではないか。

第二に、アメリカ市場の影響が軽視されている点である。20世紀以降のコーヒー価格安定策は、アメリカ合衆国の投資が不可欠であった。第一次世界大戦前に、ブラジルのコーヒー産業に巨額の投資を持ち掛けたのはアメリカ合衆国の焙煎業者たちであった。また、1920年にアメリカ合衆国で発効した禁酒法の影響で、アメリカ合衆国内のコーヒー需要が高まったことで、ブラジルにコーヒー・バブルがもたらされた。1923年には、サンパウロ州のコーヒーを保管する巨大倉庫の建設に対して、アメリカ合衆国のコーヒー関連業者たちは批判を行っている。そして、コーヒー貿易広告協同委員会(JCTPC)が中心となって行われた宣伝戦略により、1920年代には、アメリカ合衆国内でコーヒーの大衆化が促された。ラジオや映画などメディアを駆使した宣伝キャンペーンが展開された。ブラジルは、この宣伝活動に資金を提供している。1920年代後半であってもブラジル産のコーヒーは約50%が合衆国向けに輸出されている。1920年代のアメリカ合衆国におけるコーヒーの大衆化はブラジルが支えていた。それは、1930年にアメリカ合衆国の商務省によって出版された報告書*The Coffee Industry in Brazil*の中で、アメリカ合衆国の消費者が必要とする量・質にブラジルが積極的に対応していたことや、ブラジルが他のコーヒー生産地に比べ、環境的に優位性を持っていたことなどが強調され、アメリカ合衆国にブラジルの優位性を強くアピールするも

のとなっている点から確認できる。

また、トピックとサンペールはブラジルとコスタリカのコーヒー産業の比較研究を行い、20 年代以降に、両国にとってアメリカ合衆国が重要であったことを指摘している⁵⁾。特に注目したいのは、両国のコーヒー産業の転換点として、20 世紀初頭以降のコーヒー消費国の変化（ヨーロッパ市場からアメリカ市場）を挙げている点である。彼らは、それに伴いコーヒーの世界市場において多国籍企業が力を持つようになったと主張する。さらに M・F・ヒメネスも同様のことを指摘している⁶⁾。彼の論文では、世界恐慌以前におけるアメリカ合衆国の視点からコーヒーの歴史が描かれており、コーヒーが新興の消費社会の主要な飲み物の地位を確立したこと、ラテンアメリカのコーヒー生産国と合衆国双方でコーヒーによる富が蓄積され、多国籍企業が市場における優位性を獲得するようになったことが指摘されている。これらの点を考慮すると、ブラジル、アメリカ合衆国両国の視点から 20 世紀初頭、特に第一次世界大戦以降がコーヒーの歴史の中で重要な時期であったことは間違いないだろう。

以上の諸研究と照らし合わせても、ブラジルは合衆国と強い結びつきを持っており、特に著者が対象としているサンパウロ州はその結びつきが強かったことから、本書ではアメリカ合衆国とサンパウロ州の関係性についての考察が不足しているように感じる。しかし、著者がサンパウロ州のコーヒー農園主と政治権力との関係について、新たな解釈を提示したことは明らかであり、それは今後のブラジルのコーヒーの歴史に関する研究動向に影響を与えるであろう。

1920 年代のブラジルの経済の発展が輸出

部門ではなく、むしろ社会の多様化のプロセスによって引き起こされたことを示唆している。

註

- (1) ボリス・ファウスト著、鈴木茂訳『ブラジル史』明石書店、2008 年。
- (2) 1830 年代に地方で頻発する内乱を鎮圧するために国民軍という民兵隊が組織され、国民軍の指揮を委ねられた大土地所有者は、大佐コロネルという称号を与えられた。その地方の有力者コロネルが介入する政治システムのことを指す。
- (3) Francisco Vidal Luna, Herbert S. Klein, *The Economic and Social History of Brazil since 1889*, Cambridge University Press, 2014.
- (4) 州政府が一定量のコーヒーを買い上げてストックし、値上がりを待って売却することであり、買い上げ資金は外国からの借款によってまかなわれた。
- (5) Steven Topik, Mario Samper, *From Silver to Cocaine: Latin American Commodity Chains and the Building of the World Economy, 1500-2000*, Duke University Press, 2006, pp. 118-146.
- (6) Michel F. Jiménez, “From Plantation to Cup”: Coffee and Capitalism in the United States, 1830-1930, in William Roseberry; Lowell Gudmundson, Mario Samper (ed.), *Coffee, Society, and Power in Latin America*, John Hopkins University Press, 1995, pp. 38-64.

(野口駿之介)

Elizabeth McCahill

Reviving the Eternal City: Rome and the Papal Court, 1420-1447

Harvard University Press, 2013, ISBN 978-0-674-72453-2

本書は、15世紀のローマ教皇と人文主義者によるローマ復興計画を考察することで、キリスト教世界の首都たるローマのルネサンスを検討するものである。かつて、人文主義者が活躍した15世紀のローマは、キリスト教的中世と、古典古代の復興たるルネサンスとの対置を念頭に、教皇庁の腐敗の時代としてのみ捉えられてきた。これに対し、スティンガーは、1985年の『ローマのルネサンス』(*The Renaissance in Rome*)において、宗教とルネサンス文化との融合を念頭に、文化、政治、経済面からローマのルネサンスを高く評価した⁽¹⁾。特にスティンガーは、ローマ教皇庁の復権が果たされたエウゲニウス4世のローマ帰還(1443年)とニコラウス5世(在位1447-1455年)治世以後の教皇や人文主義者たちによる都市ローマを中心とした文化的創造活動に注目してローマのルネサンスを描いた。本書の著者マケイヒルは、このスティンガーの議論を基礎としながらも、アヴィニョン捕囚や教会大分裂後の混乱、教皇至上主義と公会議主義との対立をはじめとする内外の問題により、暗黒の時期とされてきた15世紀前半の教皇マルティヌス5世(在位1417-1431年)とエウゲニウス4世(在位1431-1447年)の治世に光を当て、教皇庁と人文主義者による都市ローマの復興活動を考察する。

本書の構成は下記の通りである。

- 第1章 Rome's Third Founder? Martin V, Niccolò Signorili, and Roman Revival, 1420-1431
- 第2章 In the Theater of Lies: Curial Humanists on the Benefits and Evils of Courtly Life
- 第3章 A Reign Subject to Fortune: Guides to Survival at the Court of Eugenius IV
- 第4章 Curial Plans for the Reform of the Church
- 第5章 Acting as the One True Pope: Eugenius IV and Papal Ceremonial
- 第6章 Eugenius IV, Biondo Flavio, Filarete, and the Rebuilding of Rome

以下、本書の内容を概観した上で、いくつかの疑問を提示したい。

第1章は、教皇マルティヌス5世による都市ローマの美化政策、文化政策を積極的に評価する。サンタ・マリア・マッジョーレ教会の三枚続きの祭壇画には、『雪の奇跡』が描かれている。従来、これはマルティヌス5世が自身の権力を維持するための手段の一つとみなされてきた。というのも、この『雪の奇跡』は、彼の出身家系であるコロナ家とサンタ・マリア・マッジョーレ教会との繋がりを示す作品であったからである。マルティヌス5世による、ローマの街並み維持のための官職、道路管理官(Maestri di strada)の復活とその新興貴族への付与も、旧来の貴族と対立していたマルティヌス5世の政治戦略の一つとされてきた。これに対し、著者は、教皇マルティヌス5世による一連の政策は、単なる政治的プロパガンダではなく、荒廃していた都市ローマを美化することが目的であったと主張する。当時のローマは、ペトラルカの書簡や都市ローマの官僚ニコロ・シニョリ

一りの『都市ローマとその卓越性の記述』によれば、大きく荒廃し、古代の栄光からかけ離れた状態にあった。そうした中で教皇は道路管理官を通して、街の美化や復興を推進しようとしたのである。また、祭壇画もその色彩が、都市ローマの慈善団体ラコマンダーティを表すものであることから、それを讃えるものであった。ここからは、マルティヌス5世が、キリスト教世界を束ねるローマ教皇としてだけでなく、ローマの市民であり、貴族であり、慈善団体の一員である、という複数のアイデンティティを抱え持つ、ルネサンス期の教皇に特有の性格を有していたことがわかる。

第2章では、マルティヌス5世とエウゲニウス4世の治世における、人文主義者による教皇庁内での官職の獲得と、彼らの文化活動の意義を明らかにする。ローマ教皇庁は、この時期、修辞法を駆使できる人文主義者を重用していた。教皇庁の書記官職は、安定した俸給を得ることのできる官職であったので、人文主義者たちはその官職を獲得するために、しばしばギリシャ語作品の翻訳とその枢機卿への献呈を行っていた。とはいえ、そうした人文主義者らの作品では、宮廷での生活は理想化されて描かれない。例えば、マルティヌス5世以来長く書記官を務めた人文主義者のポッジョ・ブラッチョリーニの『滑稽譚』では、教皇やそれに従う聖職者らは不道德で利己的な姿をもって表されている。この人文主義者たちの宮廷への批判的態度は、古典古代のストア派の影響によるものであり、教皇宮廷の表象に古典古代の要素が取り入れられていたことを示している。著者は、こうした人文主義者の教皇庁における書記官として、文化人としての活動の中に、15世紀前

半の教皇庁のルネサンスを見るのである。

第3章は、教皇政治の根幹が動揺していたエウゲニウス4世の治世において、人文主義者が、修辞能力を基に自身のアイデンティティを形成していたことに注目する。エウゲニウス4世の治世は、教皇権への挑戦が見られた時期であった。即位した1431年のバーゼル公会議では、枢機卿主導の下、教皇権を弱める決定が出され、前教皇のマルティヌス5世の出身家系のコロナ家による反乱では、エウゲニウス4世はフィレンツェへと逃れざるを得なかった。1443年になってようやく、エウゲニウス4世は、フェッラーラで公会議を開催したあとローマへの帰還を果たした。こうした動揺する教皇宮廷において、人文主義者らが新たな文学的スタイルを作り上げていたことに、著者は注目する。従来、指摘されてきたのは、カスティリオーネの『宮廷人』(1528年)に見られるような、ルネサンス宮廷における礼儀(courtoisie)作法や規則遵守の風潮であった。これに対し、それより前の15世紀前半には、教皇宮廷に出入りする人文主義者らは、修辞学的能力を生かして、ユーモアを文学作品の中心に据えていたことを見出す。例えば、ポッジョは『滑稽譚』の中で、キケロの『弁論術』やカエサル演説術を取り入れ、同時代のイタリア都市民の慣習やふるまいを面白おかしく描いている。動乱期の教皇宮廷において形成された、ユーモアを基礎とした修辞能力が、人文主義者のアイデンティティを構築する大きな要素であったと主張するのである。

第4章では、エウゲニウス4世と教皇宮廷が、聖職者の質の向上のための「下からの改革」を求めていることが明らかにされる。教皇や人文主義者、枢機卿は教会改革

をそれぞれ異なる方法で推進していた。例えば、エウゲニウス4世は、フランチェスコ会内において、ベネディクト会則を遵守する厳修派の運動を支援することを通して、教会改革を図った。厳修派は、修道司祭の誠実さに欠ける態度を問題視し、規則の本来の厳格さを取り戻そうとしていた。他方、人文主義者は、その著作の中で模範的な聖職者をたたえることで、教会改革を進めた。ポッジョは3人の枢機卿に対する追悼演説の中で、また、レオン・パティスタ・アルベルティは『ポンティフェックス』と『家族論』の中でそれぞれ、聖職者のふるまいの模範を提示し、それに倣うことを司祭や助修士らに勧めている。そして枢機卿も、例えばドメニコ・カプラーニカのように、聖職者養成機関としてのコレッジョを設立し、そこに上記の人文主義者の著作を配架することで、聖職者の内面の改革に努めた。こうした教皇、人文主義者、枢機卿による教会改革は、「四肢 (in membris)」たる聖職者や信徒のふるまいや内面に焦点を当てたものであり、「頭 (in capite)」としての教皇庁の改革を求める公会議主義者のドラスティックな教会改革に対抗したものであった。

第5章では、エウゲニウス4世が儀礼を通して自身の権威を高めようとしていたことが考察される。彼はそれ以前の教皇たちのように教皇礼拝堂内部での儀礼だけでなく、例えば、1443年のローマへの帰還時にローマ市民を巻き込んで行ったプロセッション（行列）のように、教皇が公に登場する儀礼を積極的に行っていた。また、神聖ローマ皇帝の戴冠式や各国の大使を招いた聖燭祭の礼拝では、ローマ教皇の権威が世俗の権威に優越することを象徴的に示す様々な儀礼の仕組みをとり入れていた。さ

らに、枢機卿に対しては、これまで不安定であった彼らの地位を正式に保証する勅書を発行し、任命式を挙行することで、教皇を頂点とするヒエラルキーを可視化しようとした。こうしたエウゲニウス4世の儀礼からは、礼拝堂内部で私的に執り行われる中世的な儀礼の要素とともに、公衆を前にした華やかに行われる儀礼というバロック期に引き継がれる要素が生み出されていた。これらの点から、中世とルネサンス、ルネサンスとバロックとを架橋する一面を見ることができる。

第6章は、人文主義者の作品や、教会施設の建設、記念碑的芸術の中に、エウゲニウス4世による都市ローマ再建の取り組みをみる。人文主義者であり教皇庁の書記官の職にあったフラビオ・ビオンドは『再建されたローマ』の中で、エウゲニウス4世による古代ローマを模範とした都市再建をたたえ、古代ローマがルネサンス期のローマに栄光をもたらすものと評価する。エウゲニウス4世の実際の計画は、ビオンドが求める古代ローマの再現だけでなく、教皇の政治的目的に沿った都市再建でもある。それは、都市ローマの重心をバチカンに移すことであり、施療院サント・スピリトやラテラノ大聖堂、サンタ・マリア・マッジョーレ教会、旧サン・ピエトロ大聖堂の復興・建設が行われたことである。こうした教皇の文化政策は、フィラレーテに依頼した旧サン・ピエトロ大聖堂の扉の制作にも表れている。この扉のレリーフにはエウゲニウス4世の功績としての公会議主義に対する勝利や東西教会の統合への取り組み、そして入市式の描写が含まれている。このように、エウゲニウス4世は、古代ローマをモデルとしながらも、ローマ内外に教皇

権の優位性を誇示することを第一の目的とした、都市ローマの再建を進めていた。

冒頭でも述べたように、スティンガーらの研究では、エウゲニウス4世のローマ帰還（1443年）以降、ニコラウス5世の治世において教皇の首位性が確立し、ローマ劫掠が起こる1527年まで、教皇庁と都市ローマはルネサンスを迎えたとされてきた。ここでは教皇権の回復が、ローマの復興の指標とされてきた。これに対し著者は、これまで暗黒の時代とされてきた15世紀前半の二人の教皇による人文主義者の登用や古典古代を援用した都市ローマの再建に注目することで、15世紀を通したルネサンスの連続性を主張する。

こうした教皇庁と都市ローマのルネサンスを再検討する本書に対し、二つの点を指摘したい。ひとつは、15世紀の教皇が進めたローマのルネサンスの特徴に関するものである。著者は、マルティヌス5世とエウゲニウス4世による人文主義者の利用が、その後のニコラウス5世の治世のそれとは異なる特徴を持っていたことに注目している。確かに、15世紀前半の二人の教皇の下で活動する人文主義者は、自由な文化活動を展開し、それが教皇の意思決定にも影響を与えたのに対し、ニコラウス5世の治世には、教皇の意思に従う人文主義者のみが登用され、教皇権の確立を主目的とするルネサンスが展開された。とはいえ、都市ローマの再建計画を見ると、変化の兆しはすでにエウゲニウス4世の治世に表れていたように思える。第1章で見たようにマルティヌス5世が主導した祭壇画の政策や道路管理官の復活は、純粋に人文主義者がもたらす古典古代を都市ローマの再建に利用したものであった。これに対し、エウゲニウ

ス4世は、第5章や第6章で見たように、都市ローマの再建や儀礼において、古代ローマの再現だけでなく、教皇権の確立を目標としていた。これは後のスティンガーが論じるニコラウス5世によるローマのルネサンス政策に通じるものであろう。それゆえ、本書では取り上げられることの少なかったニコラウス5世の文化政策も含めた、15世紀の3人の教皇のルネサンスを比較検討することが今後重要になってくるように思われる。

もう一つの点として、都市ローマの復興の現実にかかわる問題がある。本書では、人文主義者と教皇庁によるローマの都市再建の理念が主に議論されていた。しかし、実際の都市再建の計画や実行には都市ローマ政府が深く関わっていたことが想像される。教皇不在の期間が9年（1434－1443年）あったことも考えればなおさらである。この時局に鑑みれば、都市政府の官職である道路管理官が、ローマ復興の理念と現実をつなぐ存在として注目される。本書では、マルティヌス5世によるこの官職への貴族の任命と、この道路管理部局の復活が取り上げられているのみであるが、教皇と接点を持つ彼らが実際にどのように都市再建に関わっていたかを解明することは、ローマ教皇庁と都市ローマのルネサンスを理念と現実の両面から検討するために重要な課題となろう。

以上、我々の今後の課題となる点も含めて指摘したが、本書は、教皇庁史料や人文主義者の作品などを用い、これまで注目されてこなかった15世紀前半の教皇庁と都市ローマのルネサンスに光を当てたものである。それぞれ蓄積のある人文主義研究と、教皇庁研究、都市研究とを横断し接合する研究

として大きな意義を持つものと言えよう。

註

- (1) C. Stinger, *The Renaissance in Rome*,
Bloomington: Indiana University Press,
1985.

(谷香里奈)